

移しまつり、社殿を改築し、社領（神社の領地）・田畑などを寄進して、寿永三年（一一八四）、伊勢神宮の神（天照大御神、豊受大神）を安房国東條御厨として勧請（神の御霊を分けて移しまつること）した。こうして建てられたのが天津神明神社である。源頼朝は同社をたいへん敬い、ことあるごとに祈願した。文献『吾妻鏡』によれば、妻である北条政子が出産するとき、三浦平六を使いとして安産祈願をし、神馬領地を寄進されたという。

ちなみに岡野小太夫は天津神明神社に奉仕する岡野家の祖先にあたり、小太夫を初代として、現在の岡野哲郎宮司で第六十六代を数える。

### （3） 脩明神のナゾ

源頼朝によって天津神明神社が建てられる以前には、前述したように、脩明神の祠があったと言われる。祠の起源は不詳で、神代のむかしよりあったとされている。祠には現在も主祭神の一柱である八重事代主神がまつられていた。八重事代主神は大国主神の子にあたる神で、エビス神と同一の神とも言われている。

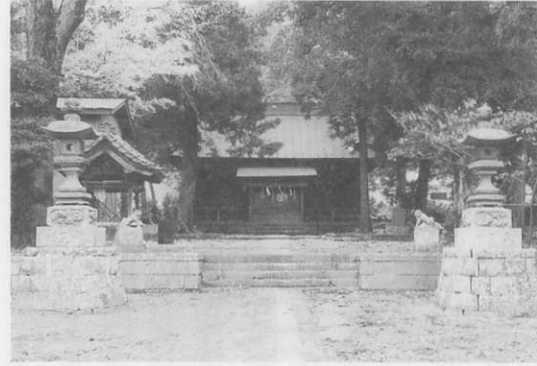
八重事代主神は国譲り（高天原から地上の国を新たに治めるために降りてくる天孫に、大国主神がそれまで治めていた国を譲った出来事）の後、事勝国勝長狭命を誘い、はるばるこの地にやってきて長い間滞在されたところ、地域がたいへんに潤ったため、人々は八重事代主神のおかげと喜び感謝して、「思いもよらぬもうけかな」と八重事代主神を脩明神として敬いまつたと言われている。これが脩明神の祠の始まりである。

脩明神の祠は東條郷にあったと古い文献には記されているが、実はその場所には諸説ある。現在でも東條という地名は鴨川市に「東條」地区として残っているが、天津神明神社のある天津は現在の東條地区には含

まれていない。だが、当時の東條郷は現在の東條地区よりも広い範囲を指すとされ、天津も含まれていた。「東條村の生まれ」と記される日蓮の生まれた小湊は天津よりもさらに東に離れた集落であることからもうかがえる。したがって、東條郷にあった脩明神の祠、後の東條御厨の場所は現在の天津神明神社の場所と考えても矛盾はない。

しかし、端的には結論づけられない問題がある。実は天津神明神社とは別の場所の、鴨川市西町に脩神社が存在する。鴨川市西町は現在でも東條と呼ばれている地区である。前述した安房誌の中にも「東條西村に

滝口脩神社と言う社があり、東鑑に謂う脩社は西村なるか天津なるか詳かならず」と記されている。このような事由もあり、以前は正統性をめぐって、天津と西村（西町）の間で論争が巻き起こっていたこともあるそうであるが、現在は議論も落ち着き、和合の道をたどっている。



脩神社（鴨川市西町）

千葉県神社庁『千葉県神社名鑑』（昭和六十二年十二月二十七日発行）によると、鴨川市西町の脩神社の祭神は天大日靈貴命、天日和志命とされ、由緒として「創立年代は不詳であるが、往古の勧請であるという。治承四年源頼朝は逃れて、当社に平家追討の祈願をこめられ、後に所願成就したので、この地を伊勢の神宮に寄進し御厨の地としたと伝える。また一説には源頼朝がこの地を滝口神社の御厨料として寄進され、その後社殿を建てて滝口脩神社と称したともいわれる」と記さ

れている。

現時点における筆者の考えは次の通りである。

元来天津にも西村にも痔明神の祠は対となつて存在した。鴨川市西町の痔神社の祭神である、天大日靈貴命は天照大御神の別称であり、天日和志命は四国阿波国忌部氏の祖神である。天大日靈貴命(天照大御神)が源頼朝によつて伊勢の神宮から勧請されたと考ええると、忌部氏が安房国に渡来した年代の方が古く、西村の痔明神の祠には元々天日和志命がまつられていたのではないか。痔明神の「モウケ」は、地域の振興によつて人々が「もうけた」と喜んだことを起源としている。すなわち、痔明神は地域に振興をもたらした神とすれば、痔明神は必ずしも八重事代主神だけを示さず、阿波や紀州より漁法などをはじめとする文明・文化を伝えた忌部氏の祖神を示してもおかしくはない。よつて、天津の痔明神の祠には八重事代主神をまつり、西村には忌部氏の祖神である天日和志命をまつり、人々は敬つていた。安房に逃れてきた源頼朝は対になつて存在している痔明神の祠両方を参拝し、祈願を立てた。頼朝はこの地を伊勢の環境に似ていると考えた。とすれば、東国に第二の伊勢の神宮を建てようと考えたのではないか。つまり、一二五社からなる伊勢の神宮のように、複数の神社をこの地に建てようとしたのではないだろうか。天津神明神社と痔神社の関係は伊勢の神宮における別宮、あるいは内宮・外宮のようなものかもしれない。

#### (4) 日蓮と天津神明神社

安房国東條郷小湊(現在の鴨川市小湊)で生まれた日蓮も天津神明神社を大切にしたいと言われている。日蓮の著した文書を読むと、そのようすをよく知ることができる。

弘安二年(一二七九)巳卯十月、門人などに与えられた文章の中に「去る建長大歳癸丑四月二十八日に安房の国長狭郡の内東條の郷今は郡なり、天照大神の御神栖、右大将家(源頼朝)の立て始め給ひし日本第二の御神栖、今は日本第一の社なり、此の郡の内、清澄寺と申す寺の諸仏坊の持仏堂の南面にして、午の時に此の法門を申し始めて今に二十七年になり……」と記されている。【要約 建長五年(一二五三)、安房国長狭郡東條郷は郡となった。源頼朝が建てた天照大御神をまつる御厨(天津神明神社)は、かつては日本第二の神社であったが、いまでは日本第一である。私は東條郡にある清澄寺で二十七年間、(天津神明神社のある)南の方角を向いて悟りを開いてきたのだ】

また、文永十一年(一二七四)二月に記された彌源太への返信の中には「……日蓮は日本国の中には安州の者也。総じて彼国は天照大神の住はせ給ふ国なり……安房の国の御厨なり。此の国の一切衆生の慈父慈母なり。かかるいみじき国なれば定て故ぞ候らむ。日蓮又彼国に生れたり、第一の果報なり」という文章がある。【要約 天照大御神がまつられた御厨は天津神明神社が鎮座する安房の国に生まれた日蓮は第一の果報者である】

さらに『録外御書 第十二巻』の中には「即ち、……安房国東條ノ郷は辺国なれども日本国の中心の如し其故は天照大神跡を垂れ給へり、昔は伊勢国に跡を垂れさせ給てこそありしかども、国王は八幡賀茂等の御帰依深くありて天照大神の御帰依浅かりしかば大神念りおほせし時、源の右大将軍と申せし人起請文を以つて天津岡野小太夫殿に仰付て……東條の郷を天照大神の御神栖と定めさせ給ふなれば、此大神は今安房国東條ノ郷に住せ給ふ。例せば八幡大菩薩は昔は西府・中比は山城国男山に移り給ひ、今は相州鎌倉鶴岡に栖み給ふ此れもかくの如し。日蓮一闍浮提の中日本国安房国東條ノ郷に始て此の正法を弘通したり。……」と